



長倉三郎先生のお言葉と思い出

Hiroshi MASUHARA 増原 宏 台湾 国立陽明交通大学理学院講座教授

長倉三郎先生が2020年4月16日にお亡くなりになりました。私は長倉研の出身ではなく、理化学研究所・分子科学研究所・総合研究大学院大学の関係者でもありませんが、長倉三郎先生に強く惹かれ、先生からお聞きしたことを参考に、自分の研究展開を考えてきました。お礼を申し上げる機会もなくお別れしてしまうことになりましたので、印象に残った「極めてフェアであられたこと」、「一流の先生方をもお叱りになったこと」など、ここにいくつか書いておきたいと思います。

私は物理化学の研究者として、1960年代後半より分子構造総合討論会(現分子科学討論会)、光化学討論会などで参加発表してきました。楽しみの1つは長倉先生のお話で、先生のご挨拶は必ずご挨拶以上のものでした。日本の科学研究はどうあるべきか、今後の物理化学・光化学をどう発展させるか、ノーベル賞の判断基準は社会や人類への貢献を反映して変わってきたなど、多岐にわたるお考えを伺うことができました。長倉先生を囲んだ懇親会の輪の中で、次の物理化学はどう展開するだろうかという話しをされたことを今でもはっきり覚えています。ある先生が「今後は社会への貢献が大事だ」と言われると、長倉先生は「化学の概念と方法論を提案するのが物理化学の役割である」とはっきりとおっしゃいました。このお言葉は私の研究展開の中で灯台のような役割を果たしてきました。転換点ではいつもこの原点に戻って、レーザーならではの研究アプローチを提案し、新しい分子現象を探索し、分子電子レベルでそのダイナミクスとメカニズムを解明する努力をしてきました。

長倉先生はときどき研究者一同を前にお叱りになることがありました。物理化学者の集まりでは、「いかにきちんと測っていかにきちんと厳密に解析するかということがいつも問題になるが、それだけで自然がわかるものではない、その人の科学的直観が、価値観に基

づいた判断が重要である、セレンディピティがなさすぎる」、と言われることもありました。また、共同研究のお話もありました。「必要であることは自分で全部やるべきだ、安易にチームを組んで、拙速な研究をしているむきが多くないか」というご指摘もいただきました。

長倉先生は研究推進および研究体制の構築を極めてフェアに、学問的に、公正に進めておられると感じました。多くの研究費、プロジェクトの審査にもあたっておられ、応募する我々はいつも長倉先生がどうお考えになるかを気にしたものです。先生はいつも真に科学的に価値があるか、科学的論理が通っているか、将来の科学に貢献するかなどを問われるので、自分の科学の検証の機会でもありました。若手から一流の研究者にまで、世界の大局観を持たせ、ときには叱り、次の世代へと繋ぐ長倉先生であったと思います。一研究者として私が人生を歩む上で、戦後の科学研究の一大巨人である長倉先生のお話を伺うことは大変ありがたい経験でした。

現在全世界がCOVID-19の影響下にあり、第二次世界大戦に匹敵するダメージを受けていると感じます。戦後化学者の世代交代が進み、化学研究が変わってきたように、COVID-19後の化学研究も大きく変わるに違いありません。経験の科学と言われていた化学研究が、戦後量子力学的理解に基づく論理の科学へと発展しましたが、長倉先生はその指導者であられました。先生の先導された範囲は高校の教科書から、東京大学、理研、日本学術振興会、科学技術振興機構、分子研、総研大、学士院に及ぶと理解しています。長倉先生からCOVID-19中、COVID-19後の学問、化学研究をどう展開してくかご教示を受けたいと願いつつ、ご冥福をお祈り申し上げます。

© 2021 The Chemical Society of Japan